保育子育て研究所
教育保育研究所

年報 14号 2016

名古屋短期大学　保育子育て研究所
桜花学園大学　教育保育研究所

地域子育て支援「いずみの広場」の取り組み

神谷妃登美（名古屋短期大学）
キーワード：子育て支援　地域　ボランティア

はじめに

少子化対策としてエンゼルプランが施行されて以来、社会の中で「子育て支援」という言葉がよく使われるようになった。「子育て支援」は、子育てと仕事の両立支援のための保育事業が中心であったが、核家族化が進み地域のつながりが希薄になってくると、子育てに不安や負担を感じる親が増えてきた。各自治体は、子育てを社会全体で支援するために様々な施策のもと事業や施設を設置しているが、行政の支援だけでは限界があり子育ての状況はなかなか変わっていかない。このような現状に、地域住民はボランティアサークルをつくり子育て支援をするようになってきた。

筆者は、刈谷市Ｉ町の地域住民が進める子育て支援活動に平成25年度よりボランティアとしてかかわってきた。そこで、これまでの活動を振り返りながら、地域住民が行う子育て支援のあり方や筆者のかかわり方について考えていきたい。

刈谷市の子育て支援

刈谷市は市外からの転入者が多く、5歳未満の子どもは約7800人（平成28年）いる。市では、子どもが健やかに育ち親が安心して子どもを産み育てることができるように支援していこうと様々な子育て支援の施策を進めている。市立の保育園や幼稚園では延長保育、預かり保育、一時保育などの保育サービスを行うと同時に、未就園の親子にも園庭開放、ほのぼのルームなどの遊び場を設けている。

地域子育て支援拠点として市が運営する子育て支援センターは4か所あり、日曜日以外は開館している。子育て支援センターでは、育児相談、子育て情報の発信、子育てサークルの支援、子育て講座、各種イベントなども行っている。また、子育て広場が市内に4か所あり週3日5時間程度開設されるなど様々な子育て支援の取り組みがされている。

また、ボランティアによる子育て支援活動も活発で、12のボランティアが市民館や地域の集会場を使って未就園児の遊び場を設け、読み聞かせ、手遊び、子育て相談、玩具作りなどを行っている。ほとんどは月1回の活動であるが、どの中学校区にも1・2か所あるため地域に密着していて子育て中の親子は気軽に行くことができる。

Ｉ町の子育て支援活動

Ｉ町には約2250世帯（平成28年）が住んでいる。住宅の増加に伴い、ここ5年間で200世帯ほど増えた。自治会活動が活発で、「地域のつながりを強め、助け合いの輪を広げ、明るく住み良い町づくり」をキャッチフレーズに、地域活性化のための様々な行事や住民会議などにも積極的に取り組んでいる。

平成14年に民生委員OBの「いずみの会」が高齢者支援と子育て支援の活動を始めた。子育て支援活動は市民館の集会室に家庭で不要になった玩具を持ち寄って親子の遊び場「いずみの広場」を設け、町内の回覧板を使って参加を呼びかけた。プログラムや相談活動などはなく、親子で遊んだり、親は子どもを遊ばせながらそこにいる人とゆったりと雑談をしたりすることが活動の中心であり、刈谷市の市民だよりには下記のように紹介されている。

> こんにちは、いずみの会のおばちゃんです。寒い日が続いていますが、皆さんお元気ですか？おばちゃんはね、子育てで大切なのは「孤立しないこと」だと思っているの。悩みを打ち明けて共感することで、育児ストレスが和らぐんじゃないかな。誰かと話がしたいな、相談したいなと思ったら、I市民館に遊びに来てね。友達がいなくても心配ご無用。おばちゃんがついているからね。お母さん同士の友達も、きっとできるわよ。I地区外のみんなも遊びにおいで。どうせやるなら盛大にやりたいじゃない。80歳を過ぎた男性スタッフもがんばっているから、おじいちゃん・おばあちゃんに会いに行くような気持ちで遊びに来てね。待ってまーす！

いずみの会は次第に高齢者支援を主に活動をするようになったため、平成24年度はいずみの会と自治会が協力し、翌年からは自治会と子育て支援隊（婦人会OB）が活動を引継いだ。以後、「いずみの広場」は現在も自治会と子育て支援隊が協力して運営している。スタッフは60～70歳代で男性も多く、地域の子どもをみんなで見守りながら育てていこうとする姿勢は今も変わらない。

筆者は平成25年度から保育経験者としてこの活動に参加するようになった。主に集会室に遊具を配置した遊びの場作り、活動の後半に行う20分程度のプログラム、子育て相談を担当している。

「いずみの広場」の活動

いずみの広場は毎月第3木曜日10時から11時半までである。月ごとの決まった予定はなく、訪れた母親と子が自由に遊び、後半の20分程度は筆者の計画したプログラムとその月に生まれた子の誕生日会を行っている。

広場は市民館の140㎡ほどの集会室にスタッフが遊具を並べて準備するところから始まる。筆者は場の作り方について「静的な遊びと動的な遊びの場を分ける」「発達に合わせて場をつくる」「安全に遊べるようにする」の3点を基本にして、親子で遊びながら、参加した子ども同士、親同士もかかわることができるようにと考えて遊具を配置している。集会室の中央に室内ジャングルジムを2台並べて部屋を半分に区切り、子どもが走り回ったりボールを転がしたりして活動的に遊べる場を作っている。

残りの半分はお家ごっこや乗り物の玩具を使って落ち着いて遊べるスペースと、乳児が安心して過ごせるスペースに分け、場の構成や遊具の配置は毎回同じにしている。その日によって参加者の年齢や人数が違うため、遊びの場は様子を見ながら遊具の配置変更が必要である。

【ジャングルジムで遊び場を区切る】

9時半を過ぎた頃から親子がやってくる。集会室の入口に受付を設け、親子はスタッフから名札をもらう。子どもはテープに書いた名前を上着の背中に貼るようにしているため、受付では子どもの名前を尋ねてスタッフと親子とのやりとりが始まる。ここではスタッフを含め参加者全員が名札をつけていて、尋ねなくてもお互いがだれかわかるようになっている。スタッフは「Aちゃん、上手に滑れるね」「ほらSちゃん、ここにも車があるよ」などと子どもの名前を言いながら声を掛けることができ、子どもも自分の名前を呼ばれることで相手に親しみがわいてくる。集会室のあちこちで子どもたちは母親とボールを転がし合ったりごちそうを並べたりして、思い思いに好きな遊びを楽しんでいる。ジャングルジムやすべり台で遊んだり、スタッフに作ってもらったバルーンアートの剣をもって2・3人の幼児が追いかけっこをする姿もある。スタッフは遊んでいる子どもに声を掛けながら笑顔で見守っている。

【ごちそうを並べてお家ごっこ】

乳児は座布団の上に寝て活発に動く幼児たちを眺めていることが多いが、寝返りやハイハイをすると周囲にいる母親やスタッフが嬉しそうに声を掛け、雰囲気が和やかになる。子どもを見ながら母親同士の雑談やスタッフと母親との会話も多く聞かれる。時には子ども同士の物の取り合いなどがありそれを気にする母親もいるが、スタッフたちは「物の取り合いも子どもにとっては自我が育つ大切な機会」と声を掛けている。子育てや孫育てを経験した人からのこのような言葉は、若い母親に安心感を与えるだろう。

11時頃から片づけを始める。大きなジャングルジムをみんなで運び、玩具を片付けてからプログラムに移る。筆者が担当するプログラムは、手遊びや親子のふれ合い遊び、紙芝居などをして、その後、誕生日会で誕生児を祝っている。3年前に誕生日会を始めた時には、知らない人の誕生日を祝うことに戸惑いも見られた。最近では誕生日の子を紹介しみんなでハッピバースデーを歌いながら祝うことが定着してきたためか、参加者は楽しそうである。母親も我が子の誕生日を家族以外の人からも祝ってもらい嬉しそうな様子である。みんなで力を合わせて遊具を片付けたり誕生日の子を祝ったりすることで、参加者は互いの顔や名前を覚え親しみを感じたり楽しさを共有したりできるだろう。このようなかかわりは、同じ地域で生活する親子にとって大切と考える。

【乳児を間にお母さん同士の会話】

活動の変化とネットワーク

筆者がボランティアの一人として参加した最初のころは、遊び場を提供することが「子育て支援」と考えてスタッフは様子を見守っていることが多かったが、次第に子どもや母親に積極的に話しかけるようになってきた。

経験を重ねながら「子育て支援」について理解を深めてきたスタッフは、親の気持ちに寄り添うことの大切さを感じ、親子へのかかわり方や親子が喜ぶような内容を工夫するようになった。子どものリクエストに合わせたバルーンアート作りや、町内文化祭に向けて親子の色紙作りなども広場の活動の中で行われるようになった。

【スタッフにバルーンアートを作ってもらう】

スタッフは子どもたちが楽しく遊べるようにと考え、市の子育て支援センターで遊具を借りてきたり、講習会で学んだ玩具を作って持参したりするようになってきた。また、母親の気持ちに寄り添いながら話ができるようになりたいと子育て支援課が開催する「育児ママ訪問サポート事業」訪問員養成講座に参加して学ぶスタッフも出てきた。「今まで話をしなかったMちゃんが初めて話した」と喜んだり、「Kちゃんのお母さんの表情が明るくなってきた」とスタッフ同士で話したりすることもあり、「活動を続けるのは大変だけど子どもやお母さんが変わっていくのが嬉しい」という言葉が聞かれた。

今年度は参加者からの要望で、8月に「お父さんと遊ぼうDAY」を設けたところ16組の参加があり、体操やバルーン遊びをした。参加した父親からは、たくさんの子とふれ合えて良かった、みんなで広い場所で走り回ることができた、他の子どもたちや地域の方々が温かく子どもが伸び伸びと楽しめた、おじいちゃんおばあちゃんがすごく面倒を見てくれたなどと好評であり、パパとはなかなかこういう機会を持てないので度々あると嬉しい、年に数回は今日のようなパパ向けのイベントが実施されるとよいなどの要望もあった。

【パパと一緒にバルーン遊び】

3年前から社会福祉協議会のKさんが「いずみの広場」に時々参加するようになり、地域サービス担当として地域の活動状況を福祉協議会に持ち帰ったり、母親や運営者に必要な情報を提供したりしている。子育て中の親にも気軽に学んでほしいと、福祉協議会登録のボランティアグループを紹介し、「お母さん、子どものための防災講座」や「子どもの看病・手当の仕方」の講座を開いてきた。社会福祉協議会が子育て中のお母さんにも防災に興味を持ってもらいたいと企画した「防災講座」では、災害時に我が子をどう守るかを聞きながら「防災Duck」のカードを使って身を守るポーズを親子で体験した。「子どもの看病・手当の仕方」の講座では、子どもに起こりやすい事故についての話を聞き、包帯の巻き方、心肺蘇生・AEDの使い方などを体験した。このような講座は、子育て中の母親にとっては関心はあるが子ども連れて参加することは難しい。この広場では子どもと遊びながら気軽に参加できるので、活動の一つとしてプログラムに取り入れていけると良いだろう。

刈谷市には子育て支援ネットワーク会議があり、子育て支援団体の交流やネットワークづくりをしているが、活動報告が中心になっていないだろうか。他の団体の活動を参考にしたり協力し合ったりして、それぞれの運営がより活発になるようなネットワークをつくることが必要と思う。

【日赤ボランティアによる講座】

参加者の感想

いずみの広場には毎回20組程度の親子がやってくる。今年度の登録者は60組である。参加の動機や感想を把握するために、平成28年11月、12月に参加した母親にアンケートを依頼したところ20人の協力があった。アンケート内容は、子どもの年齢、参加回数、昨年度の参加状況、交通手段、参加理由、参加の感想、子どもの様子を見て気付いたこと感じたこと、いずみの広場運営についての要望の8項目である。

参加した子どもは3か月から3歳4か月と幅広く、兄を遊ばせるために3か月の弟を連れてきた人もいたが、11か月の子どもを連れて参加した母親が2人いた。また参加回数については、今回が初めてが2人、2回目3人、3回以上は15人であり、半数の10人は昨年も参加していた。交通手段は、徒歩6人、自転車4人、自動車10人で、市民館は家から近いために参加しやすくリピーターが多いと思われる。参加理由は、子どもが喜ぶ、家が近い、同年代の子と遊べる、同年代の子どもだけでなくおじいちゃんやおばあちゃんとふれ合えるなどがあった。また、感想として、玩具を取り合ったり譲り合ったりなど他人とかかわり合うことができて良い、室内で走り回れ下がじゅうたんで安心、紙芝居や手遊びなど家ではできないこともやってもらえる、たくさんの親子がいて近所にも子育て中の人がいるなどがあり、参加理由や感想からは、子どもを楽しく遊ばせたい、他の子とかかわる機会がほしい、自分も子どもと一緒に楽しみたいという親の気持ちが読み取れる。家庭の狭い空間で2人で過ごすことの多い親子にとって、子どもが玩具で楽しそうに遊んだり、ジャングルジムやすべり台で元気に遊んだりする姿を見るのは嬉しく、ここでは安心して遊ばせることができと感じていることだろう。

【好きな遊びを楽しむ】

我が子の様子を見た感想は、家にない玩具で楽しそうに遊んでいて私も嬉しい、笑顔を見せてくれる大人に笑顔を返せるようになって嬉しい、広いスペースで伸び伸び遊べて良いなどがあり、母親は子どもの変化や成長に喜びを感じているようである。母親の中には、子どもが家族以外の大人とふれ合えることを嬉しく思っている人が多いことも分かった。以下は母親Aの感想である。

> I市民館のよいところは、支援センターと違い同じ年頃の子どもだけでなく、おじいちゃんおばあちゃんたちとも触れ合える時間をもてることだ。子どもはおじいちゃんおばあちゃんのような、何でも受け止めてくれる温かい雰囲気を持つ人に心を許しやすい気がする。我が家の場合、祖父母と同居しておらず、おじいちゃんおばあちゃんと触れ合える機会が少ないので、このような場はありがたい。
> 我が子は女の子だが、おばあちゃんよりもおじいちゃんが好きなので、おじいちゃん達が多く参加されていた前半の頃は、知らないおじいちゃんの膝に座らせてもらったり、ボール転がしをして遊んでもらったりと嬉しそうな姿が見られ、親としても嬉しい気分であった。
> 我が子にとっておじいちゃんおばあちゃんと触れ合える貴重な場であるため、今後も引き続き参加をしていきたい。

おわりに

山懸（2008）は「子育て支援活動の目標の一つは、親子と地域とのつながりを作ることにあります。親子が地域とつながるためには、活動そのものと地域が有機的に結びついていなければなりません。そのつながりによって、地域の活性化をもたらすことができるならば、地域にとっても、活動にとっても有効ということになります。」と述べている。「いずみの広場」は自治会が運営するからこそ親子と地域とを結び付けやすいのではないだろうか。広場に来た母親に、盆踊りや朝市など地区の行事を紹介し参加を呼びかけることで、親子と地域の結びつきができてくるだろう。町内文化祭で市民館に自分たちが作った色紙が飾られていれば、親子も興味をもって見に行くだろう。

また、山縣は目標について「親子の生活は地域とは無関係に営むことができないものであり、いずれ地域社会との関係を自分で取り結びながら生きていかなければならないものであるため、親子と地域社会との関係を構築するということです。」とも述べている。母親は広い集会室で元気に遊ぶ子どもたちを見ながら、雑談を始め次第に親しくなっていく。同じ町内に住み同じように子育てをしていることが、子育て仲間としての親しみを感じさせているのではないだろうか。母親が仲間をつくり自ら積極的に子育てができるように地域として支えていくことは大切なことであろう。

筆者は保育経験者として地域の子育て支援活動に4年間かかわってきた。「いずみの広場」は、スタッフが何でも受け入れてくれるゆったりとした雰囲気が親子にとって心地よく、安心感につながると感じている。ボランティアとして活動に参加する筆者は、スタッフが子育て支援活動を楽しみながら積極的に取り組めるように援助することと、保育者としての目線で母親の気持ちを受けとめ、子どもの成長を見守ることが役割と考えている。

【引用文献】
かりや市民だより　平成25年1月15日号　P9
『地域の子育て環境づくり』（2008）大日向雅美編
汐見稔之、佐藤博樹、小宮信夫、山縣文治　ぎょうせい　P89　P106

【参考文献】
『子育て支援の潮流と課題』（2008）汐見稔之編
佐藤博樹、大日向雅美、小宮信夫、山縣文治　ぎょうせい